ジョン・ウィリアム・ウォーターハウス《マリアムネ》に関する批評分析と「白衣の女」について

國學院大学　本美 里紗子

ヴィクトリア朝後期の画家 J. W. ウォーターハウス（John William Waterhouse, 1849-1917）は、ユダヤ教の儀礼を描いた《神託伺い》（1884 年）を契機に、《聖エウラリア》（1885 年）や《魔法円》（1886 年）など、同時代の歴史画の主流に反して、古代ギリシア・ローマ神話を典拠としない作品群に取り組んだ。本発表ではウォーターハウスの代表作であり、ハスモン朝の王女の裁判を主題とした《マリアムネ》（1887 年）を取り上げ、同時代の文学作品との関係性、および評価を明らかにする。

《マリアムネ》は、1887 年のロイヤル・アカデミー展でひときわ目立つ位置に展示され、好評を得た。その後、実業家の W. Q. クイルターが購入し、1889 年パリ万国博覧会をはじめ 20 世紀初頭に至るまで各国で開催された展覧会に出品されて画家の名声を高めた。しかし本作に関しては、典拠とされるフラウィウス・ヨセフス著『ユダヤ古代誌』（95 年頃）の当該記述との比較検討や、ヴィクトリア朝期の演劇との関連性について議論が主に展開し、同時代の批評の網羅的な分析はなされていない。

発表者は以上を踏まえた上で、1887 年から 20 世紀までの美術批評を網羅的に調査分析した。その結果、3 割ほどの批評家たちが《マリアムネ》に用いられた「白の色調」について言及していることが判明した。特にマリアムネの纏う白い衣装は賞賛を集めたが、その表現には、同時代の小説家 W. コリンズ著『白衣の女』（1860 年）の流行が関与していると発表者は判断する。

同書は 19 世紀後半の芸術家に大きな影響を与えた。例えば、ホイッスラーの《白のシンフォニー No.1－白衣の少女》（1861-63、1872 年）は、ロンドンでの展示の際にこの小説の流行を利用して宣伝された。そして、1871 年には J. E. ミレイも《夢遊病者》で白衣の女性を描いている。

こうした事例と同様に《マリアムネ》に描かれた白い衣装の女性にも『白衣の女』の影響が表れているのではないか。同時代の批評家 W.メイネッドは、『現代美術と芸術家』（1887 年）において、ウォーターハウスによる《ホノリウス帝のお気に入り》（1883 年）は、コリンズの『アントニーナ』（1850 年）を典拠にしたと記述している。ウォーターハウスがコリンズの小説に親しんでいたとするならば、『白衣の女』を参照し、《マリアムネ》の制作を行った可能性が高いと言えよう。

本発表は、ヴィクトリア朝後期における「白衣の女性」というイメージやそれを題材にした小説の隆盛を踏まえ、《マリアムネ》についての同時代評価を問い直すことを目的する。これまでは見過ごされてきた『白衣の女』との関係性に着目することで《マリアムネ》の新たな解釈が可能になるだろう。